

詠風集

十月号



花鳥諷詠

10月号 (451号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠[®]

令和7年10月 ■ 第451号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	井上 泰至 2
	涌羅 由美 4

この人の作品	矢野 玲奈 7
--------------	---------------

辻桃子句集『白桃抄』（文學の森）

花鳥諷詠—生きた実践	成田 一子 8
------------------	---------------

質問箱	10
-----------	----

立子とブラジル俳句（1）

一勝ち組も負け組も	井上 泰至13
一頁の鑑賞	真篠みどり14
	大石 靖子15

虚子研究 『六百五十句』 研究（68）	16
---------------------------	----

カレンダーこぼれ話①	24
------------------	----

卯浪	25
----------	----

風報	27
----------	----

新刊紹介	30
------------	----

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」（「ホトトギス」大正2年7月号）

花鳥諷詠選集

井上泰至選

特選五句

蟻の道とは近道のなかりけり

泉大津 多田羅 初美

夏落葉雨に打たれて裏返る

山口西 やすのり

しじみ蝶雨の色して雨に消ゆ

高崎並木 秋野

天道虫草に溺れてしまひけり

名張奥田 美代子

山側の窓も全開夏座敷

鹿兒島 松尾 あやめ

二句短評

一句目——右へ左へ、仲間同士ぶつかり、点々と続き、また一匹で。蟻全体の写生となっている。単純化することゝも写生のひとつ。

二句目——常緑樹が初夏に古い葉を落とす。土も葉も乾いて居らず、裏返しのも交じり、光っている。細密で詩情のある写生。

入選六十句

炎帝やバス揺らぎ来て揺らぎ去る 東京 梅野 ぎん

暗がりの土間を濡らして早苗籠 白岡 小林カヨ子

夕焼の真つ只中の終の家 小樽 伊藤 玉枝

空を読み一気に田植してしまふ 熊本 西 美愛子

花の香のしてゐる汗の少女かな 今治 横田青天子

邨若葉千年楠を真中に 伊万里 田中 南嶽

初蟬に天地息づきはじめけり 浜田 田中由紀子

大西日より半島の異国めく 神戸 玉手のり子

どこからか浜辺の唄や月見草 北九州 元田 品子

包帯のとれし術後の涼しさに 福山 佐藤 浩子

心地よき朝の目覚めや半夏生 諫早 安原さえこ

鮎釣の名人にして齒科医なる 芦屋 山村千恵子

憧れの彼の背中へ打つ草矢 高知 前田まこと

影動くやうに船虫散らばりぬ 鹿兒島 永里 瑞代

石ひとつのみの涼しさ堂の跡 天理 松田 吉上

田を植ゑて十日田の水見えざりし	洲本	高田	菲路
洗濯機満杯にして五月晴	福岡	吉浦	弘子
端居して風の消息待つばかり	高松	島谷うた子	
木天蓼の白が目につくほどの峡	鳥取	宮脇	典子
ひとさじの塩の湿りや半夏生	野々市	吉田	正則
一筋に始まり蜘蛛の罫となりぬ	金沢	保田	智枝
湯上がりの髪の先まで雷怖し	太宰府	柴田慧美子	
海の色奪ふ土用の日差かな	輪島	向	佐ち子
これほどの束重からず小判草	高松	佐々木	新
七月の森は心を開きけり	箕面	須知香代子	
青柿や写経の正座崩れなし	堺	吉田	敦子
告知受け帰路の日傘を深くさす	香川	三宅久美子	
点滴の音なきリズム明易し	糸島	藤原	泰子
放ち飼ふ鶏にこぼるる花蜜柑	鹿児島	永井	紀子
草蜚兄の一句のありにけり	熊本	宗像	和子

月見草ひとゆすりしてほどきけり	高松	荒井多美枝
旬のもの玻璃の器の夏料理	舞鶴	早村
疎らなる影も無口に日の盛り	高松	細川
座しるれば百合香りくる席なりし	生駒	南
故郷の道は坂道藪蚊道	半田	稲葉
いま挽ぎし胡瓜をもみて膳の上	札幌	東
夏帽や影の濃くなるグラウンド	鹿児島	森
牧水を読むなり夏の酒すこし	宮崎	熊瀬川貴晶
空よりの祇園囃をあふぐかな	大津	伊藤
紫陽花のブーケのやうな一枝切る	熊本	南野
滝落ちて数多の祈りありにけり	諫早	榎本喜美代
雲の峰背に刑務所監視塔	金沢	守作
曲がるたびバスに触れ行く合飲の花	山口	辻岡
写真とるとて炎天にたたさるる	宇佐	磯永喜八郎
一声でをはる初蟬肩すかし	岡山	荒木

● 涌羅由美選

特選五句

滴りを集め瑞穂の国となる

福岡井上京子

散り敷ける沙羅に昨日と今日の色

岡山大野文子

奔放に揺れて絡まぬ夏柳

高松岩瀬由美子

古本屋黴の香を積む嵩のあり

石川白根寿子

夏霞朝日が溶かしゆきにけり

浜松平澤洋子

二句短評

一句目——水の惑星と呼ばれる地球。その水の最小単位である「滴り」が、稲穂のみずみずしく育つ豊かな国になる、というスケールの大きな句。「瑞穂の国」という日本国の美称に託された作者の思いも感じられる。

二句目——朝に咲き夕べには散る、たった一日だけの無常の花「沙羅」が、咲いていた花の形のままに、蕊の黄を上向きにして散り敷いている。その白さにも時間の経過を発見した作者の「見るから観る」への写生力。

緑蔭と緑蔭繋ぐ風の道	大牟田 藤好 信子
散り敷ける沙羅に昨日と今日の色	岡山 大野 文子
草笛を吹きつつ列の最後尾	西予 黒田 美穂
朝顔は意外に寝坊かも知れぬ	伊賀 子日 康子
夫の紺吾の白日傘旅続く	鳥取 椋 則子
夏料理締めの一椀のみ熱し	徳島 吉田 有子
ふるさとの西瓜たたけば山の音	福岡 山永多恵子
日時計の丘の極暑でありにけり	阿南 田中 栄子
ドライヤー切るやいきなり蟬時雨	千葉 駒井ゆきこ
島育ち由緒正しき日焼かな	高松 郡としゑ
補欠の子きれいなままの白い靴	東京 鹿谷 白月
草の丈かくれても見ゆ夏帽子	川崎 高原 沙織
皆くちを開けて観てゐる星涼し	米子 前田 千
日焼した開会式の面構へ	横浜 守谷 一剣
小さき手宝石つかみ夜店市	亀岡 井内 房子

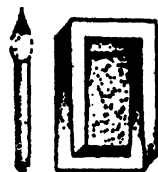
入選六十句

麦の秋関東平野風琥珀	東京 庄嶋 里子
空を読み一氣に田植してしまふ	熊本 西 美愛子
次々と貰ひ手決まる目高の子	日置 帶田なづな
九十九折雲より現るる合歡の花	長崎 松本 洋子
ここだけの話かくしてゐる扇子	福岡 山口 裕子
紫陽花にあぢさゐいろの雨が降る	伊賀 光岡代里子
初蟬に天地息づきははじめけり	浜田 田中由紀子
大西日より半島の異国めく	神戸 玉手のり子
これ以上放つておけぬ茂りかな	西予 三瀬 教世
雨の色脱ぎ高々と梅雨の蝶	大牟田 介弘 紀子
鳩の子の終にさざ波乗りこなす	福岡 清水 蓉子
花菖蒲神慮の風に解けゆく	福岡 西村 芳山
さくらんぼ入れて魅惑のカクテルに	太宰府 持永真理子
考への蹟くたびの暑さかな	鹿児島 柳橋かすみ
修羅を待つ奈落の底の蟻地獄	倉敷 鴨井 愛子

万緑に窮屈さうな村一つ	久留米 野口 桂子
網戸よりすべり込みたる暮色かな	福岡 島原 仁代
万象の影一尺の炎暑かな	札幌 押野 美江
祭獅子喜怒哀楽は篠の笛	穴栗 平瀬 成紀
うなぎ焼くけぶり吐き出す老舗かな	伊万里 大久保花舟
何気なき涼しき心くばりかな	高松 肥塚 英子
蜻蛉の光の翅の紛れ易す	さぬき 原 道子
正座より胡坐が似合ふ冷奴	糸島 宮脇 睦子
ついと来てすうつと蛍星となる	石川 宮下 末子
猫の手に届かぬ先に金魚の緋	朝霞 鈴木 月惑
鵜簪の落ちて深まる小瀬の闇	八尾 米澤 悦子
ひとさじの塩の湿りや半夏生	野々市 吉田 正則
五月雨や千古の樟の杜深し	福岡 西村 榮子
河骨の花ぬきんでて影持たず	石川 堀口 道子
野地蔵へ風のいたづら落し文	伊勢崎 飯塚 徳明

池畔とは風棲むところ夏柳 糸島 占部ゆき江
 風鈴の音は透明風の道 穴栗 徳田 紫紋
 想ひ出も共に抜げて土用干 市原 飯塚 咲子
 海の色奪ふ土用の日差かな 輪島 向 佐ち子
 蜘蛛の囀の幾何学模様風を編む 神戸 平尾 孝子
 残像を重ね止めの大花火 米子 中村 襄介
 草の闇透けて色置く蛇莓 高松 浅野クニ子
 少しづつ父を離れて水遊 吹田 小井川和子
 炎天の黙白光の爆心地 神戸 塩見 成子
 えご散れる光の糸を引きながら 大阪 福本めぐみ
 連投のエースは汗を拭はざる 東京 荒井 桂子
 しじみ蝶雨の色して雨に消ゆ 高崎 並木 秋野
 父の日や未だ消せずに留守電話 高知 和田 和子
 天道虫草に溺れてしまひけり 名張 奥田美代子
 山百合の孤高なる香を風が知る 芦屋 勝田 展子

合掌を解く如くに蓮散れり 伊勢崎 村上 節子
 偲ぶとは語り継ぐこと原爆忌 久留米 矢野 愛子
 炎天を鯨の光がはね返す 愛知 中田 恵子
 夏神楽大黒様の撒く駄菓子 福山 内田 千年
 夫逝きてあの日のままの夏帽子 大分 村上 久子
 絶え間なく滝音といふ白き水 前橋 吉川 えり
 緑蔭と緑蔭繋ぐ風の道 大牟田 藤好 信子
 サン格拉斯ヘップバーンが今も好き 福岡 野口 明子
 墨入りし句碑の尊厳涼新た 神戸 田中あかね
 一と雫ごとに山の香苔清水 熊本 粟津 玲子
 星空の底より掬ふ夜光虫 香川 照下 璃当
 日傘みな左に傾ぐ道に入る 神戸 石田 裕美
 田の泥の修羅に蓮の白極め 岡山 門田 和美
 風に乗り峠越えゆく夏の蝶 北海道 安田 豆作
 蟬の声聞きながら蟬生まれけり さいたま 後藤 光風



編集後記

黎明を思ひ軒端の秋簾見る

虚子

戦後八十年の特集記事や番組が多い夏だった。掲句は終戦の詔勅を受けての連作の中的一句。国家建設の「黎明」を思い、帝国日本の葬送を「秋簾」に見る。「秋」は時間の転変を意味する「春秋」の含意を持つ。循環し生々流転する日本の自然と、これに即応した俳句がある限り、日本人の営みとその心は紡がれ、かならず復興する。それに自分では資するのだ。何も変わってはいないではないか、と虚子は未来に向けて、また歩みだしたのである。

○九月十四・十五の両日、全国大会を盛会のうちに終えました。昨年を上回る百八十六名のご参加でした。中国地区のお働きに感謝申し上げます。来年は関東地区の主催で、鎌倉で行われる予定です。

○十二月七日、東京江東区の芭蕉記念館で、国際俳句シンポジウムを行います。テーマは、ブラジル移民の俳句です。井上が国際俳句への扉を見据えた虚子の構想を語り、虚子に代わってブラジルを訪れた星野立子の活躍を、星野愛さんに報告して頂きます。日本への移民問題が議論される時代、また夏や初秋が熱帯化してしまっている昨今の課題にもつながる、生きたテーマです。録画は後日配信もいたします。

○汀子賞、ならびに協会賞の応募が始まっております。賞の価値は会員の皆様の力作にかかっております。ご応募をお待ちいたしております。

○六月に亡くなられた辻桃子さんの句

集評を、ご縁のあった成田一子さんに書いて頂きました。桃子さんの師の一人であった藤田湘子も、晩年は虚子に関心を寄せました。今後はそうした他派からの虚子への評価の意味も研究すべき時代になってきたかと思っています。

〈みな虚子のふところにあり花の雲〉
(山田弘子) この句の含意を噛みしめると、とも言えましょうか。

(井上泰至)

花鳥諷詠十月号(通巻第四五一号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費に含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和七年十月一日

発行人 井上泰至

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七 八六八二〇

印刷所 日本ハイコム株

〒112-0014 東京都文京区関口一一九二